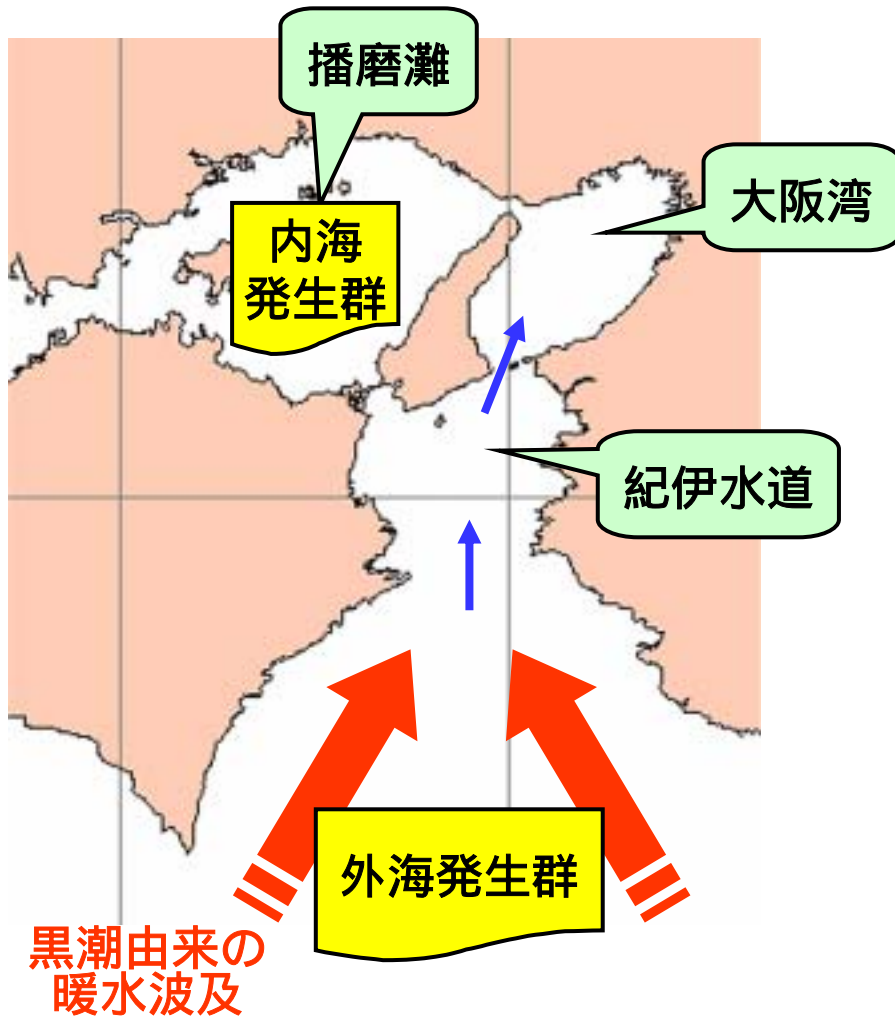


瀬戸内海東部海域における春シラスの来遊量は、主に外海発生群の加入に依存しています。したがって、外海域での産卵量に加えて、黒潮由来の暖水波及の規模・パターンが漁場への来遊量を決定する重要な要因となっているものと考えられます。

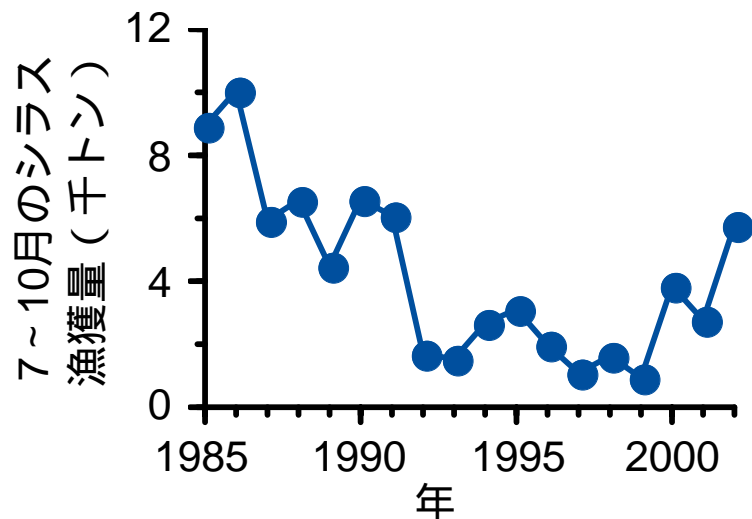
瀬戸内海東部海域におけるカタクチシラス春季発生群  
(春シラス)の分布と海況との関係



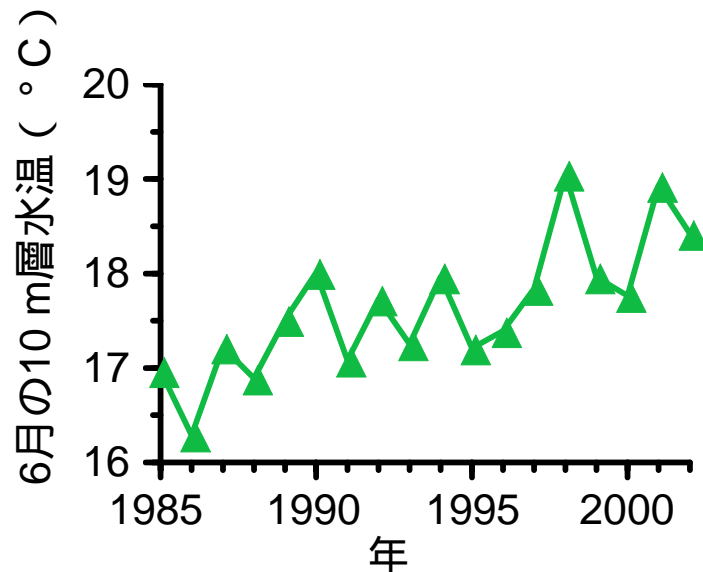
紀伊水道部における夏シラスの来遊量は、春シラスと同様、主に外海発生群の加入に依存していることから、黒潮由来の暖水波及の規模・パターンが来遊量を決定する重要な要因となっているものと考えられます。

一方、内海発生群が中心となる播磨灘の夏シラスについては、水温や餌料環境が来遊量に影響を及ぼしているであろうことが示唆されています。

瀬戸内海東部海域におけるカタクチシラス夏季発生群  
(夏シラス)の分布と海況との関係



播磨灘における7~10月のシラス漁獲量の経年変化。1992年以降、低水準で推移してきましたが、ここ数年は回復傾向にあるようです。



播磨灘における6月の10 m深での水温の経年変化。値は播磨灘で行われている浅海定線調査の全定点で得られたデータの平均値を示しています。



播磨灘における7~10月のシラス漁獲量と6月の10 m深水温との間には、負の相関関係（水温が低いほど漁獲量が大きい）がみられるようです。ただし、ここ2年間については、このような関係から外れており、水温以外の要因（例えば、6月のカタクチイワシ産卵量、餌料環境など）がシラス漁獲量の決定に大きく寄与していることが示唆されます。